

真理と実感

水野 隆一

イエスの復活を記す聖書箇所のうち、ルカによる福音書だけに記されているエマオへの道での出来事（24：13～35）は、示唆に富む物語です。

イエスが復活したその日の夕方、2人の弟子がエルサレムからエマオへ歩いています。2人は、この一週間の出来事、中でも、今朝の驚くべき報せをどう考えるべきかを語りあっていました。

彼らの言葉（19～24節）を読むと、彼らはすべて知っています。ところが、彼らはそれを信じることができないでいます。彼らは、空の墓を見に行ったわけでもなく、そこで不思議な若者に会ったわけでもなく、見聞きした人から聞いたに過ぎません。その意味で、彼らの知っていることは、「情報」と名付けていいでしょう。

その彼らがイエスの復活を信じるようになるためには、何が必要だったでしょうか。1つにはその「情報」と彼らがイエスと共に体験したことを結びつけること（イエスによって説明を受ける）、もう1つは「情報」に含まれている「真実」を実感する（イエスがパンを割く様子を見る）ことでした。

これは、私たちが「真理」を体得するプロセスに似ています。はじめは、「正しいこと」の知識を得ます。その「正しいこと」を自分の体験と結びつけ、そして、最終的には、「正しいこと」の「正しさ」を実感して、それを「真理」として受け入れます。ある意味では、実感の伴わない真理などありません。

しかし、真理の「実感」には、とても危うい一面があります。実感さえあれば、一般的常識とどんなに違っていても、時には、反っていても、どんなものでも「真理」として受け止められてしまうからです。そして一旦「真理」として受け止められたなら、それによって、他の意見や考えは退けられてしまいます。

「実感」を持ちながら、同時に、そのような偏狭さから自由になる方法はあるのでしょうか。根拠となった「実感」を検証し、本当に「真理」を得たのだろうかと自省し続けることしかないだろうと、私には思えます。毎年イースターを祝うのも、繰り返して出来事を思い返すと同時に、あの時の実感を問い合わせなのです。

今年も、イースター礼拝が行われます。「復活」の出来事を実感するために、同時に、真理と実感の関係を見つめ直すために、ランバス記念礼拝堂（上ヶ原）にお越しください。

（神学部教授）